東日本大震災 復興支援活動

もっと、ずっと、きっと Vol. 6

いままでも、これからも

まだまだ、みなさんのチカラ、必要です。

※この誌面でのご報告内容は、2013年2月末現在のものです。
最新の情報は「もっと、ずっと、きっと」ウェブサイトをご覧ください。

http://www.felissimo.co.jp/s/motto/

もっと、ずっと、きっと　検索

女性の元気が東北を元気に

「とうほくIPPOプロジェクト」

とうほくIPPOプロジェクト

東日本大震災に対する息の長い復興支援の必要性から、女性による東北の産業復興を支援する「とうほくIPPOプロジェクト」を2012年6月に発足しました。このプロジェクトは、責任者、主体者メンバーが女性であることを条件に事業提案を公募し、審査の結果選ばれた個人・団体に支援金を支給して、被災地の産業復興のきっかけづくりにつなげていきます。

毎月100円から「とうほくIPPOプロジェクト」を応援

「とうほくIPPOプロジェクト」の支援金は「東日本大震災毎月100円義援金(基金)」ならびに「東日本大震災もっとずっときっと基金」を活用させていただいています。

東日本大震災
毎月100円義援金(基金)　基金

掲載番号	案内番号	お申し込み番号
841	004-01	TN-665-119

月1口 ¥100

→全額(100円)「東日本大震災義援金(基金)」として運用されます。
※ストップのご連絡があるまで、毎月自動的に継続いたします。ひと月、99口までお申し込みいただけます。
※基金のみのお申し込みの場合、送料は無料です。
※この基金は、各種プレゼント・キャンペーンの対象外です。商品の特性上、交換・返品はお受けできません。
※毎月のコレクション商品代金と一緒に月々のご請求となります。また同じお支払い方法になります。
※この義援金は税法上の控除の対象にはなりません。
●毎月1回、お申し込み口数を「東日本大震災義援金(基金)」とさせていただきます。

第1期 支援対象活動

※下記以外にも支援対象活動が2つあります。別ページの取材記事をご覧ください。

布ぞうりで生きがいづくり
一般社団法人あゆみ

布ぞうりの講習会を通して生きがい作りのお手伝いをします。希望に応じてスキルアップ講習を行い、販売用の作品が作れるようにアドバイスしています。

宮城、岩手県内

語り部&体験ツアー
長洞元気村　なでしこ会

気仙地方の米粉で作る伝統和菓子「ゆべし」の生産・販売や、長洞元気村への体験ツアーを受け入れ、語り部・昼食提供なども行っています。

岩手県陸前高田市

ワンコインのみんなのレストラン
一般社団法人
紫波中央駅前コミュニティー・プラザの会

1月10日、ワンコインで食事を楽しめるレストラン「キッチン 停車場」をオープン。常連さんもできてきました。思いは「みんなの居場所づくり」です。

岩手県・紫波町

カフェでコミュニケーションづくり
さんさカフェ

「さんさカフェ」のお食事券で日替わり定食+ドリンク+アイスクリームのセットを食べていただき、ひとときの楽しいコミュニケーションの場を提供します。

宮城県・南三陸町

放課後スクールで児童支援
一般社団法人チーム王冠

震災で離散し交流の場がない子どもたちが集える「放課後こども広場」を運営。被災した珠算教師を雇用し学びの提供と同時に教室再開のきっかけを作ります。

宮城県石巻市

お母さんによる家庭料理の食堂
ぐるぐる応援団

「いしのま★キッチン」で、名産のたらこの醤油漬など、メニューを開発中。また、津波で腐食した壁などを修繕し、食品衛生の環境を整えています。

宮城県石巻市

手づくり品の製作指導・販売
ママサポーターズ

「うみねこハウス」を拠点に、手づくり品の製作指導や販売で被災者を支援しています。また積極的に県外ボランティアを受け入れ、交流の場を提供しています。

宮城県石巻市、女川町

地元食材で移動カフェ
行商カフェ 雄勝十五浜

雄勝町をはなれた地元出身者の集いなどに、旬のわかめや特産のほたてを提供しています。移動販売店舗の場所決定のための情報収集とPR活動中です。

宮城県石巻市雄勝町

情報誌創刊&編集者の育成
のはら舎

福島県内のクリエイター、ライターをメンバーに、原発事故後を生きる全ての人々の声と活動を紹介する雑誌創刊とライター育成に取り組んでいます。

福島県内など

手づくりマスクなどの製作&販売
任意団体 peach heart

ふくしま女子発信のピーチハートブランド。手作りマスクなど製作&販売しています。女子のためのブランドとして歩んでいきます。ウェブサイト、新商品も企画中です!

福島県内

学び合いの場づくり
蓮笑庵くらしの学校

震災と原発事故により大きく揺らいだ旧来の価値観に替わる新しい生き方・暮らし方を、教える側と学ぶ側の垣根を越えて共に学び合う場をつくります。

福島県田村市など

手づくりワークショップの開催
zakka market モカフルー

「モカフルー」は手づくり大好きな雑貨屋さん♪みなさんにウキウキ楽しい時間を過ごして欲しいとさまざまなジャンルのワークショップを開いています。

福島県会津地方など

第2期の支援対象活動は2013年3月に発表し、第3期の募集も開始する予定です。

募集情報・詳細はこちらから
とうほくIPPO　検索

ともにしあわせになるしあわせ

FELISSIMO

環境に配慮した印刷物です。
環境負荷を低減し、リサイクルに適した紙・印刷工程を採用しています。

59 NANIWA-MACHI CHUO-KU KOBE 650-0035 JAPAN TEL.078-791-8585

被災地から出発し、世界へ飛び立ちたい

「ふれあい癒しを学んでボランティア1000人募集プロジェクト」でボランティアに免疫向上ハンドケアを指導している

女性たちが学んだ技術は、サロンだけでなく継続的な支援活動にも生かされています。メンバーには、自宅が被災し仮設住宅から通うママたちも。

とうほくIPPOプロジェクト

“女性の元気が東北を元気に”

女性による東北の産業復興を支援する「とうほくIPPOプロジェクト」。女性たちの活躍が、家族を元気に、地域を明るく、社会をいきいきと。そんな未来に向かう女性たちの最初の「一歩」となることを願って。第1期支援対象活動の中から、2つの活動を取材しました。

セラピー支援＆サロン運営

杜の都チーム ドルフィンドリーム

2012年12月、仙台市若林区にCOCOKARA SALONをオープン。地域のみなさまと健康をはぐくむサロンを目指し、セラピストとしての一歩を踏み出しました。

ラピスト・天野龍さん（上写真：左から3人目）を中心に、被災地の仮設住宅での高齢者ヘルスケア活動を行う。2013年1月時点で101回の被災地訪問を行っている。

Q 今回の「とうほくIPPOプロジェクト」の支援により、天野さんがされたことは？

A 実は私たちが活動を継続していくために、早くサロンを開設しなければ、ということを以前から考えていました。そんな時に支援者の方から「とうほくIPPOプロジェクト」を教えていただきすぐに応募したんです。おかげさまで昨年12月15日、木のぬくもりあふれるこだわりのサロンをオープンすることができました。

Q サロンのオープンで変わったことはありますか？

A 自分たちの店ができたことで、セラピストとしてのプロ意識というのをスタッフから強く感じるようになりました。サロンを開設し、私たち自身の給料を稼ぎ、活動資金も稼ぎたい、そういう部分がすべてクリアになったわけではありませんが、少なくともそこを目指して一生懸命働ける場ができたというのは、本当に大きいです。

Q 被災地へずっと継続して行っている。気持ち的につらくなったりすることは？

A 被災地へうかがってお父さんやお母さんたちとふれあえることが本当に嬉しかったので、むしろ私たちが元気をもらっていました（笑）。継続して被災地を訪ねることで、たくさんのうれしい言葉をいただきますし、仮設住宅で暮らすお父さん、お母さんたちも心を開いてくれます。また私たちの目標として、被災して仕事を失ってしまった女性が手に職をつけて自立する、そのための場として固定のサロンの必要性を強く感じていましたので、そのあたりがモチベーションにつながっていたのかもしれません。気持ちがつらくなることはなかった、と言ったら嘘になります。それ以上の喜びがある、だから一緒に歩ませていただけたのだと思います。

Q 今後の活動の目標などはありますか？

A 「世界を癒（い）しでいっぱいにしよう」というのが、私たちのビジョン。被災地から出発し、世界へ飛び立ちたいです。具体的にはベトナムやカンボジアとか。女の子たちがまともな仕事がないせいで、劣悪な労働環境に置かれています。そうした状況を、私たちが変えたいと思っています。現地でサロンを開き、そこで女の子たちにセラピストとしての技術を教える、そして一人前になってセラピストとして働いてもらう。そうした活動を経済的にきびしい地域で展開していきたいです。

Q 今回支援してくださったフェリシモのお客さまに伝えたいメッセージはありますか？

A みなさまの支援で素敵なサロンが完成いたしました。ここを拠点に、私たちはこれからも被災地を回り続けますし、また世界にも旅立ち、たくさんの癒しを届けたいと思っています。これからもスタッフ一同、志を高く持ちみなさまからのあたたかな支援を忘れずに、活動を続けていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

一歩踏み出せば道は開ける

休耕地＆障がい者支援農業

交流ステーションみのり

休耕地を活用したサツマイモの栽培・収穫と干し芋への加工などの活動に取り組んだほか、NPO法人化や新規耕作地の確保など基盤整備を行いました。

いわき市内の耕作放棄地を借りて、障がいを持つ子どもたちのお母さんが、サツマイモや大根など農作物を栽培し、干し芋や切り干し大根、味噌、漬け物を試作している。昨年12月にNPO法人を取得し、作業場も借りることができ、試作品を食べてもらいながら早い時期に商品化して、口コミで少しずつ販路をつくっていきたいという。

Q「とうほくIPPOプロジェクト」の支援を受けて、どのようなことをされていますか？

A これまでメンバーの自宅で作業をしてきましたが、支援を受けて作業場を借りられるようになり、サツマイモを一度に大量にふかせるように、調理器具も購入しました。作業場の隣には小さなビニールハウスも設置し、基盤整備ができました。

干し芋は茨城県が全国生産の九割を占めますが、いわき市も日照時間が長く、気象条件は同じです。お昼前後の三時間ほどは天日干しをして、あとはハウスに取り込みます。

Q 活動しているみなさま自身に何か変化はありましたか？

A 昨年12月に、干し芋を作っている知的障がい者施設をみんなで訪ね、サツマイモの栽培や天日干しの方法など、いろいろていねいに教えていただきました。製造工程の中で同じことで悩んでいることがわかり、また苦労話もお聞きして、勇気づけられました。いまの私たちとは施設の規模がまったく違いますが、5年後、10年後にそうなれることを目標に、がんばっていけたらと思っています。

Q 農作物の加工品のほかにも何か考えていることはありますか？

A 子どもたちの障がいはそれぞれ違い、農作業はむずかしい子どももいます。そのため農産品のほかに、クラフトの商品も開発し、子どもひとりひとりに合った仕事がつくれたらと思っています。

ひもを編んだバッグやコースターを試作しています。それにサツマイモのツルを乾燥させて何か作れないかとも考えています。畑にハーブを植えて、ポプリを作るのもいいかなぁ、などとあれこれ思案中です。

でも、まずは干し芋を早いうちに商品化したいです。今年の大きな目標です。

Q 地域の高齢農業者との交流はいかがですか？

A 私たちは素人なので、作物を育てるにも水不足だったり、虫に食べられてしまったり、失敗が多いですが、地域の人たちが何かとアドバイスをしてくれます。「みのり通信」という新聞を作り、地域にも配布していますので、ボランティアで動いてくれる人たちもいます。地域との交流が盛んになり、この場がさまざまな人たちの交流ステーションになったら素敵です。

Q 支援してくださっているフェリシモのお客さまに伝えたいメッセージはありますか？

A「とうほくIPPOプロジェクト」の名称の通り、大切な支援をゆっくり、有効に使わせていただき、必ず実りあるものにしていきたいと思っています。干し芋は自然食品です。放射能をきちっと測定し、安心できる商品をお届けしていきたいです。

少しずつ夢に近づいています。支援していただき、本当にありがたいです。

Q 今後、「IPPOプロジェクト」に参加する方々に伝えたいことは？

A 子どもを育てながら長い間、「こういうことができたら」と考えていました。でもそこから踏み出すのはむずかしく、考えただけで終わってしまいがちです。でも一歩踏み出してみると、いろんな人たちが支援してくださり、たとえ失敗してもそれを教訓に、さらに先に進めます。一歩踏み出せば道は開け、仲間と一緒に活動できます。

◀◀ このほかの第1期支援対象活動は、裏表紙でご紹介しています。

現場レポート

学生の本気とプロの本気で実現

語り：「とうほく帖」スタッフ

とうほく トピック その3

フェリシモ ラボ カレッジ

東北の学生たちと伝統を生かした支援商品を開発

NHK東日本大震災 復興支援ソング「花は咲く」

「花は咲く」

作曲者 菅野よう子さんによる6重奏アレンジ！

“癒されるなら東北” オルゴールで花が咲く

宮城大学の学生とのモノづくりは2012年の6月からスタートしました。最初の授業で「東北に対しての〝思い〟を学生たちに書き出してもらい、その思いを起点にして企画を開始。紆余曲折を経て（ホントに！）、今回フェリシモは3つの素晴らしい企画を採用させていただきました！

その中から今回ご紹介するのは、6ヵ月で6個のオルゴールがそろう「八葉琴（はちようきん）」。これを企画した学生たちは「震災後、被災地の人も、支援する人もみんなずっとがんばってきた。だから〝たまには力を抜いてもいいよ〟と言ってあげたかったんです。そんな思いから、がんばろう東北ではなく、〝癒（いや）されるなら東北〟という新しいキャッチフレーズが生まれ、オルゴールの音色と〝癒し〟が結びついていきました。」と語ってくれました。東北6県が全国からの応援で、パワーをもらって未来に向けてもっと魅力的になる。その様子を植物が「葉」に光を受ける姿になぞらえて、オルゴールを「八葉琴」と名付けたそうです。学生たちのセンスに脱帽ですね。

企画当初は、6個別々の音楽を奏でるオルゴールだったのですが、フェリシモメンバーから「連結できたり、6重奏になったらおもしろいんじゃない」なんてアイデアが!!むむむ、これはおもしろい！ どうせなら、一個一個奏でても何かのメロディになるし、6重奏させたときにひとつの曲が完成するようにしたいと思ったんです。

「このオルゴールで何の曲を奏でたいか？」と質問しました。学生たちは満場一致で、NHK東日本大震災復興支援ソング「花は咲く」と答えたんです。さらに「作曲者の菅野 よう子さんに編曲までしてもらえたら最高です！」と。この学生たちの熱意をなんとか菅野さん本人に伝えようといろんな手を尽くした結果、なんと、本当にご協力いただけることになったんです!! また、オルゴールの連結や重奏についても、国内屈指のオルゴールメーカーの技術者の方々のおかげで実現しました。

さらにこの商品は、オルゴールの台座の色塗り作業が被災されたお母さんたちの内職になります。そしてその販売価格の一部でお母さんたちの地元に花を咲かせます（右ページ）。「花は咲く」がたくさんの人によってオルゴールで奏でられるほどに、東北に本当の花が咲く。学生たちの本気と、プロフェッショナルたちの本気が、こんなに素晴らしい商品を生み出しました。たくさんの笑顔の花、咲くといいな

「がんばらなくていい。そのメッセージと、オルゴールは聴く人が手で回さないといけない、そのアクションが素敵」と菅野さんは学生たちの企画に賛同してくださいました。

連結オルゴールの試作品を手にあこがれの菅野さん（後列中央）と記念写真。

宮城大学 学生コラボ!!

ほかにも素敵な企画が！

かっぱや赤べこなど東北6県のそれぞれのキャラクターを被災されたお母さんたちが内職で絵付けした福島県の伝統「絵ろうそく」。そして青森の伝統「津軽びいどろ」を使い、青森の名所をモチーフにカラー展開したグラスなど。学生たちのユニークな企画をご覧ください！ >>WEB

色塗りを担当するお母さんたちと練習。「若い人にもしっかりした人たちがいる」お母さんの太鼓判に学生も照れ笑い。

一生流されることのない絆「東北 花咲かお母さんプロジェクト」

お母さんの手仕事が花を咲かせる

とうほく トピック その2

現場レポート

花咲かお母さんとの夢を一歩ずつ

語り：「とうほく帖」スタッフ

花植えイベントには遠く広島や名古屋などからフェリシモのお客さまにご参加いただきました。

花咲かお母さん人数 61人

基金総額（拠出済み含む） ¥982,800

基金参加のべ人数 11,123人

（2013年2月末日現在）

東北 花咲かお母さんプロジェクト

東北 花咲かお母さんプロジェクトって？

被災されたお母さんたちに、手仕事で内職収入を得てもらい、さらに商品価格の一部がお母さんたちの地元に花や緑を植えるための資金になる取り組みです。何年かたった後に地元に咲くたくさんの花や緑を見ながら、この時の仕事を誇りに思ってもらえるような、そんな支援の輪に加わってください。

東北に花植えイベントを開催！

花植えイベントに参加した方々の声

「お茶っこ」や「芋煮」を食べながら、みんなで和んだ格別の時間！「次は花見においで」そんなやさしい声をかけていただいて、参加した全員で春の訪れを待ち遠しく思いました。

今は細い桜の苗木が、5年後、10年後に、お母さんたちの〝誇り〟となる日を夢見て。「次は花見においで」その言葉が心にしみました。

プロジェクトの商品を購入したお客さまからのメッセージカードをお母さんたちに手渡しました。「メッセージまでいただけて本当にうれしいです」「自分の仕事で誰かが笑顔になってくれているんだね」など、とても喜んでいただきました。あるお母さんからは、「家やモノは流されちゃったけど、全国のみなさまと『一生流されることのない絆』ができて、とてもしあわせです」という言葉をいただきました。応援してくださるみなさまにこの言葉が届きますように……。

このプロジェクトに協力してくださっているモデルのはまじこと浜島 直子さん。『とうほく帖』2号に続いて、今年3月発刊の3号でご紹介する商品の打ち合わせに再び岩手県・大槌町に訪れました。現地のお母さんたちと一緒に針を持ってちくちく。あっという間にお母さんたちの輪に溶け込む浜島さんはいつもこうおっしゃいます「〝支援〟ではなく〝ご縁〟」。まさしくその通りで、僕自身このプロジェクトを担当したことで、東北のお母さん方からいろんなことを学ばせていただいています。中には息子のようにかわいがってくださるお母さんも（笑）。

今後このプロジェクトは、ほかの企業やブランドとも繋がりあってさらに発展していく予定ですので、引き続きの応援、ご参加お待ちしています！

大槌町で花植えができる日を楽しみに、現地での活動を積極的に続ける浜島 直子さん。

「東北にきれいな花を咲かせ隊 in 仙台」大募集！

4月27日（土）に仙台市の荒浜/蒲生地区近郊で花植えイベントを開催予定。花植えのあとには、東北名物「芋煮」で花咲かお母さんとのふれあいを楽しんでいただけます！ 詳しくはウェブサイトでお知らせします。>>WEB

TOPICS

東北の魅力を東北の方々と『とうほく帖』第3号発刊

「東北の魅力を東北の方々と一緒につくりたい」そんな思いで2012年3月に発刊した『とうほく帖』。ますます広がるネットワークと素敵な企画で2013年3月にはさらに充実の第3号を発刊。花咲かお母さんの手づくり商品や、宮城大学の学生コラボ企画、東北グルメ、もんべ（！）などオススメ商品が目白押しです。

手づくりのぬいぐるみ 東北にたくさんの笑顔を

お客さまによって手づくりされたぬいぐるみを世界の子どもたちにプレゼントする「フェリシモハッピートイズプロジェクト」。東北の子どもたちにも4,500体を超えるハッピートイズをプレゼントしました。また、2011年に引き続き2012年のクリスマスにも仙台パルコでお披露目展示を開催しました。

石巻に13,000の希望のチューリップ

球根カタログ『花hajime』よりお預かりした「はな・はな・みどり基金」を活用し、2012年10月石巻市上釜ふれあい広場を中心に、地域のみなさまやボランティア、特定非営利活動法人JENとともに約13,000球のチューリップの球根とツツジの苗を植えました。

参加すること、学ぶことが復興支援に

さまざまな生活文化の学びの場「しあわせの学校」が開催する講座催事などの参加費の一部を支援金に。また、阪神・淡路大震災の復興支援からスタートしたトークライブ「神戸学校」は、参加費の全額を東日本大震災の震災遺児のために活用しています。

8月の神戸学校 ゲストは荒井良二さん

500色の色えんぴつでアートワークショップ

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンと日本臨床美術教会の協力のもと、フェリシモの「500色の色えんぴつ」を使ったアートセラピーワークショップを2012年の12月に開催。岩手県釜石市、大船渡市、福島県会津若松市の7つの学童保育の約200名の子どもたちが色とりどりの作品を作りました。

学童保育の子どもたちにチョコレートをプレゼント

©セーブ・ザ・チルドレン

『幸福のチョコレート』カタログよりお預かりした「LOVE&THANKS基金」を活用し、クリスマスとバレンタインデイに、東北の学童保育の子どもたちに約2,400個のチョコレートをプレゼントしました。

海外の子どもたちも支援しています

いままでも、これからも　フェリシモとみなさまで一緒にできること。

これまでみなさまと一緒にさまざまな支援活動に取り組んできました。みなさまの思いが重なり合えば、少しずつ未来に近づいていくとフェリシモは信じています。

東日本大震災 毎月100円義援金（基金）累計参加口数	1,219,326口（2013年2月末現在）
基金から生まれた支援活動のべ活動数	52（2013年2月末現在）
復興支援基金付き商品お申し込み口数	257,242口（2013年2月末現在）
とうほくIPPOプロジェクト支援対象活動数	40（第1期・第2期合計）

基金収支状況のご報告（2013年2月末現在）

みなさまからお預かりした基金（累計）

¥157,961,334

※こちらの金額には、「フェリシモメリーしあわせ基金」と「フェリシモの猫基金」、「フェリシモわんにゃん基金」は含まれておりません。

まだまだ、みなさんの手カラ、必要です。

基金拠出実績（累計）

緊急支援	¥11,920,042	生活復興支援	¥10,538,045
子ども支援	¥27,034,679	産業復興支援	¥30,604,000
心のケア支援	¥ 7,754,255		

>>WEB 各活動のウェブサイトへのアクセス、最新情報はウェブサイト『もっと、ずっと、きっと』をCheck!　もっと、ずっと、きっと　検索

現場レポート

子どもたちの思い 未来に届けたい

語り：絵本『明けない夜はないから』担当者

大切なのは忘れないこと、つなぐこと

荒井良二さんと宮城の子どもたちの絵本づくり

とうほくトピックその4

私は2011年夏の宮城県名取市をスタートに、気仙沼大島、南三陸町で開催された「こどもスマイルミュージカル」に携わり、現地の子どもたちの「言葉」にたくさんの感動をもらいました。子どもたちの未来を見るたくましさ、そしてさまざまな支援に対する感謝の気持ちを、日本中、世界中に届けたい。未来につないでいきたい。そんな思いが日に日に大きくなり、結果として「世代を問わず見て感じてもらえる、年齢も問わない"絵本"」という媒体をつくることになるのは必然的な流れでした。しかし、いざ絵本にするとなると、それはとてもむずかしい作業でした。絵本で伝えたいのは震災の怖さではなく、子どもたちの前向きな気持ち。けれども、感動的なミュージカルを絵本にしても、実際にミュージカルを見ていない人には伝わらないんじゃないか？こうしてもんもんとした数ヵ月が過ぎました。

フェリシモのお買い物ポイントによる「メリーしあわせ基金」で「こどもスマイルミュージカル」を開催。

荒井 良二さんが描く絵本

大人から子どもまでたくさんの方に読んでほしい

『明けない夜はないから』

絵本『明けない夜はないから』は、フェリシモや全国の書店などで販売中。東北6県の公共図書館に寄贈する予定で、たくさんの方に読んでいただけるよう願っています。

そんな時、編集者の松田 素子さんとの出会いがありました。松田さんは、ご自身の編集という仕事で被災地の応援をしたいと常日ごろから思われていたこともあり、今回の絵本の趣旨にご賛同いただき、子どもたちの思いを伝えることを重視した絵本のラフをあげてくださいました。そのラフを見ながらミュージカルの総合プロデューサー新田 新一郎さんと松田さんとミーティングをした時「この絵本の絵を描ける人は一人しかいない」と、みんなが同じ作家さんを頭に浮かべました。それが絵本作家の荒井 良二さんだったわけです。

多忙な荒井さんにご参加いただけるか不安でした。しかし、そんな心配をよそに荒井さんは快諾のうえに、被災地の子どもたちと一緒に絵を描くアイデアをご提案くださいました。

2012年8月、荒井さんと被災地の子どもたちによる絵本づくりのワークショップが実現しました。

あの日の夜空はくやしいくらいきれいだった

「子どもたちは天才だから。あとは大人が少しの魔法をかけるだけ」そう言って荒井さんは子どもたちと一緒に汗と絵の具まみれになって大きな紙に向き合いました。

「あの日の夜空はくやしいくらいきれいだった」絵本の帯にはそう書かれています。それは、絵本の中で紹介している被災地の子どもたちの3月11日の体験談でも、当日の夜空の美しさがたくさん書かれているように、あんな過酷な状況の中でも、美しいものを素直に美しいと感じる子どもたちの感性とそのたくましさに将来の希望を感じたからでした。実はこの絵本のストーリーは、「こどもスマイルミュージカル」のテーマソング「明けない夜はないから」の歌詞なんです。みんなで力を合わせて前に向かって生きていこう。そんなメッセージが込められています。荒井さんは絵の上に「ボタン」を置くことで、子どもたちが体験した時間や思いなど、さまざまなものをつなぎました。「大切なのは忘れないこと。そしてつなぐこと」そう新田さんもおっしゃいます。この歌をたくさんの人に歌いついでほしい、この絵本をたくさんの人に読んでほしいと願っています。

『音のボタン』

この本には、たくさんの声がつまっている。たくさんの声は、大いなる音になって歌になり、音楽となった。音は彩りをまとい、何かと何かをつなぐボタンになった。誰かと誰かを出会わせ、誰かと誰かに寄り添う音のボタンに。

荒井良二

絵本のストーリーにもなった、こどもスマイルミュージカル「明けない夜はないから」。誰もが自由に歌えるようにウェブサイトで歌詞と楽譜を公開中！みなさんもぜひ歌ってください。

>>WEB